横芝光町民ギャラリー企画展図録

考古資料で見る
横芝光町の歴史展３
奈良・平安時代

横芝光町教育委員会

はじめに

町民ギャラリーでの「考古資料で見る横芝光町の歴史展」も今回３回目を迎え、この度は奈良・平安時代を取り上げました。

奈良・平安時代は、日本が律令という法律が整備され、ようやく外国に対して国という形が整ったときであります。そうした時代、地方はどうであったのかを知る手がかりとして、遺跡の発掘調査によって得られた豊富な資料があります。町内でもこれまでに20箇所余の遺跡が発掘調査され、そのほとんどの遺跡から奈良・平安時代の資料が出土しました。それはこの地域でも奈良時代になって、急速に人口が増加した事を示し、国の成立が地域の発展にも大きな貢献を果たした事をあらわしたとも言えます。それはその時代が平和であり、地域社会が暮らしやすかったと推定されます。

しかし、平安時代中頃になると、平将門の乱をはじめとして社会が不安定化し、律令制下のもと公地公民化した地域社会が、有力者の私有化による荘園の増加を生み、律令制が崩壊していきました。そういう情勢の中、特に房総では平家をはじめとする武士の発生と、戦乱の頻発とによって非常に荒廃していったと言われています。

そうした時代の消長を、町内を発掘調査されて出てきた資料を紹介する事によって、その実相を知っていただければとの企図をもとに展示しました。奈良・平安時代と言うと上述の様に、発展していく平和な時代と、崩壊の中で衰退していく時代とであり、出土した資料はどちらかと言うと地味で、あまり個性がなく面白くないのが正直な所です。それでも町内からは、トピックとなるような物もあり、また展示できませんが、当地から正倉院に収納された御物の布もあり、日本の歴史の一翼をになっていた事を物語っています。そうした事を想像しながら、展示をご覧いただければ幸いです。

目次

はじめに

目次　　例言
横芝光町の歴史年表　1
Ⅰ．古代の日本　2
Ⅱ．古代の千葉、横芝光　3
Ⅲ．横芝光町の奈良・平安時代遺跡　4
　1．篠本城山遺跡　5
　2．神山谷遺跡　8
　3．新台遺跡　15
　4．芝崎遺跡　18
　5．中島遺跡　29
　6．八石田遺跡　33
　7．小川台遺跡　33
　8．北長山野遺跡　34
　9．東長山野遺跡　36
　10．長倉宮脇・宮ノ前遺跡　38
　11．長倉鍛冶屋台遺跡　41
　12．中台大木戸遺跡　41
　13．石作台遺跡　42
　14。古川新田低地遺跡　42
　15．庚申遺跡　43
　16．粉豆遺跡　43
Ⅳ．おわりに　45
参考文献　46

例言

本書は、平成26年10月11日から12月21日まで、横芝光町立図書館２階超民ギャラリーで開催された企画展「考古資料で見る横芝光町の歴史３」展図録である。

本図録の執筆・編集は、横芝光町教育委員会社会文化課生涯学習班道澤明が当たった。

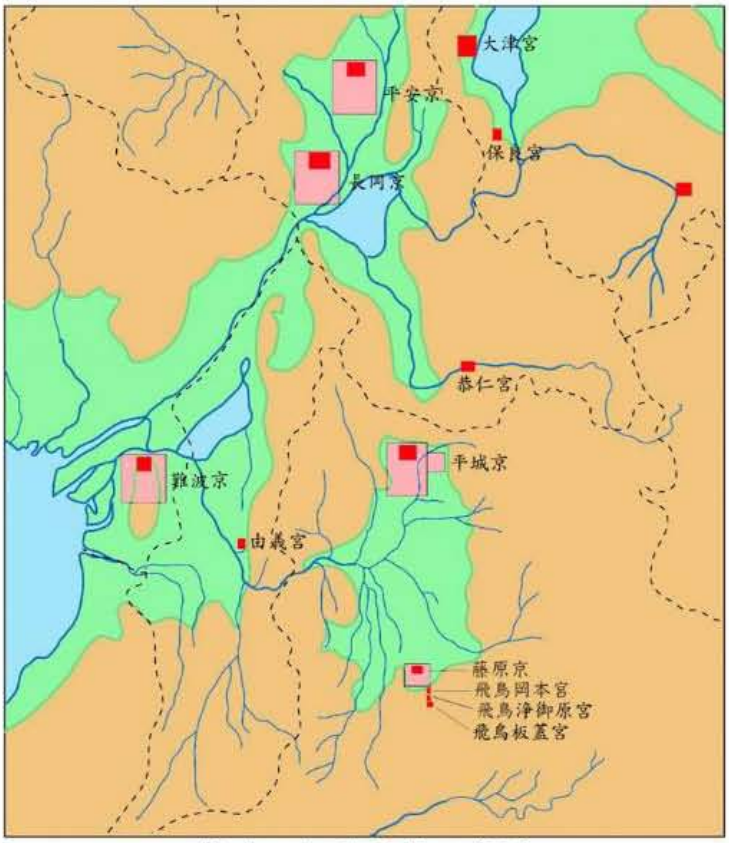
横芝光町の歴史年表（飛鳥時代～平安時代）

| 時代 | 古代 | | |

Ⅰ．古代の日本

７世紀の日本、大化の改新、壬申の乱を経て、律令が制定され、ようやく国の形が整ってきた。８世紀になると聖武天皇が平城京に遷都し、奈良時代と呼ばれる都を中心として、地方も古墳時代のような国造豪族の支配から、国・郡などに分国され、国府・郡衙が設置され、国の統治体制が完成された。日本は大きく五畿七道に分けられ、さらに都を中心に大きな地域は、上下、前中後を付けて細分された。房総でははじめ南北で上総・下総に分けられ、その後、半島南部を安房に分国され、江戸時代まで続いた。郡については、時代の変遷によって、その時々の事情で移動があった。

「延喜式」による古代の行政区分（千葉県の歴史２より）



畿内における都の変遷

畿内では、壬申の乱後、天武天皇が飛鳥浄御原に宮を置いたのち、桓武天皇が平安京遷都するまで、都が転々と移動した。

中でも聖武天皇は、平城京遷都後、そこを嫌い、畿内各地を放浪する様に移動した。

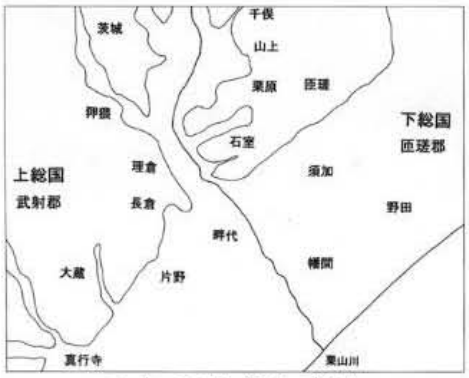
この様に国の中心である都が移転している事から、地方の国府・郡衙も移動した可能性が考えられる。上総国でも未だにその国府が何処にあったか分かっていない。その国内には国府地名が各地に遺り、もしかすると転々と移動したのかもしれない。

Ⅱ．古代の千葉、横芝光

古代の千葉は、はじめふさの国と呼ばれ、やがて大化の改新を経て、全国を60余国に分国されると、上総と下総とに分けられた。そして養老2(718)年、上総国の内、南部の4郡を割いて安房国が分国され、3国となった。この内、下総国は猿島、結城、豊田が現在の茨城県、葛飾が東京都になっているかなり広い範囲であった。そしてそれぞれの国には国府が置かれ、さらに国中を郡に分け、郡衙を置いて統治に当たった。上総国、下総国ともに11郡に分けられ、その堺は東で栗山川、西で村田川とし、その間を結ぶ線は台地の中央を通っている。その結果、上総国武射郡が北へ大きく食い込んでいる。これはおそらく古墳時代における豪族の勢力伸長による反映と見る事ができよう。

今の横芝光町は、栗山川を挟んで町域が広がり、古代の上総国武射郡と下総国匝瑳郡の一部をそれぞれ取り込んでいる。しかし、川を挟んでの両側では、文物の大きな違いはなく、むしろ交流を示す資料があって、国郡の違いが大きな隔たりを作る事はなかった。

房総三国分郡図（千葉県の歴史2より）

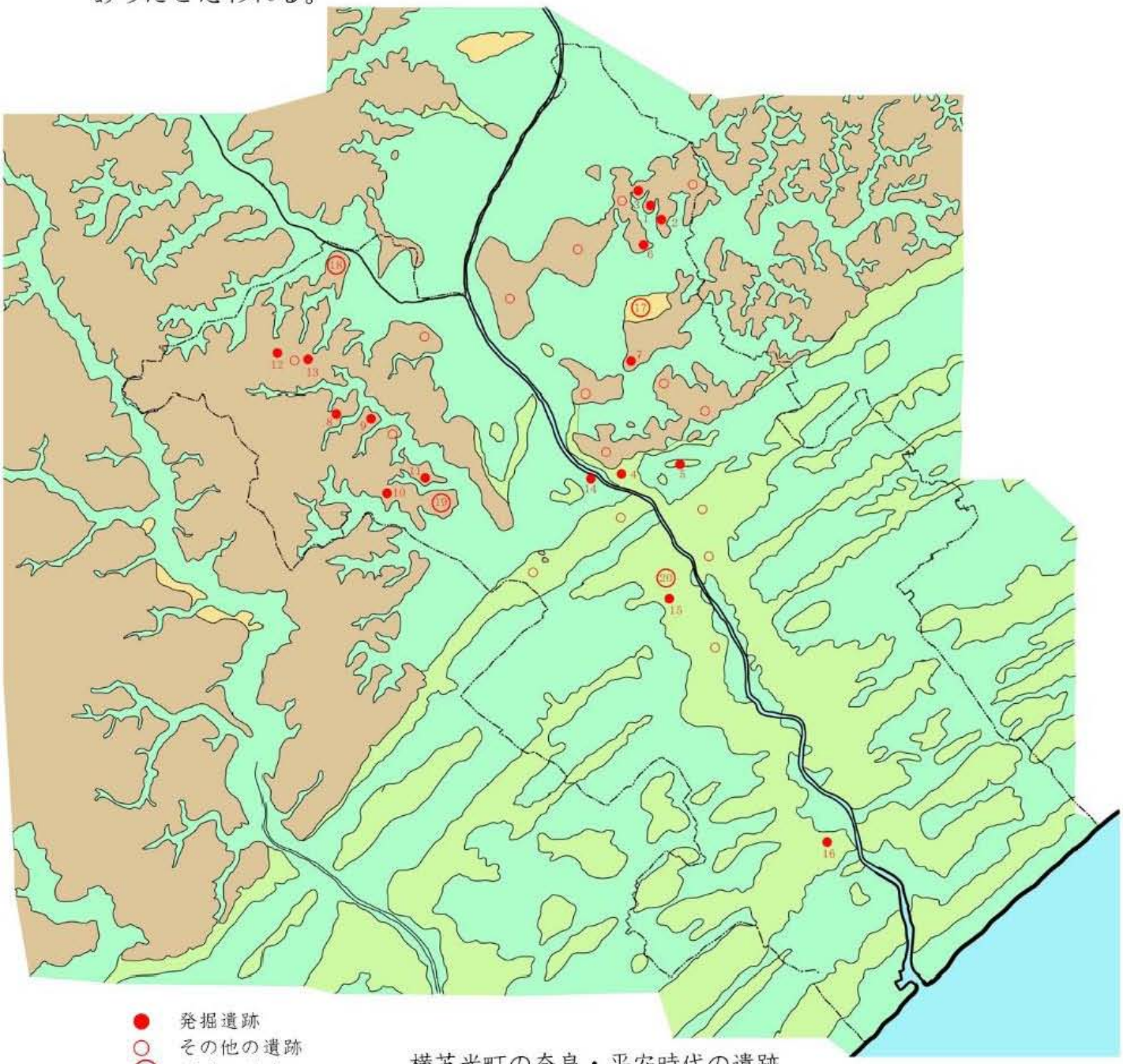


町内の郷名比定地

平安時代10世紀に編纂された和名類聚抄には、現在も残る郷名が記されている。狎猥は牛熊、長倉はそのままである。そのほか畔代は栗山、理倉は木戸台、片野は八田、石室は小川台、幡間は目篠・原方などに推定されているが、確かな事は分かっていない。

Ⅲ．横芝光町の奈良・平安時代遺跡

横芝光町には、現在知られているところだけでも20箇所ほどの、奈良・平安時代の遺跡があり、その立地は台地上だけでなく、九十九里平野の低地の微高地にも広がり、当時の人々の活動の場が広がっていた事が分かる。また、海岸に近い屋形には、平良兼居住伝説が残る様に、今とほとんど変わらない景観であったと思われる。



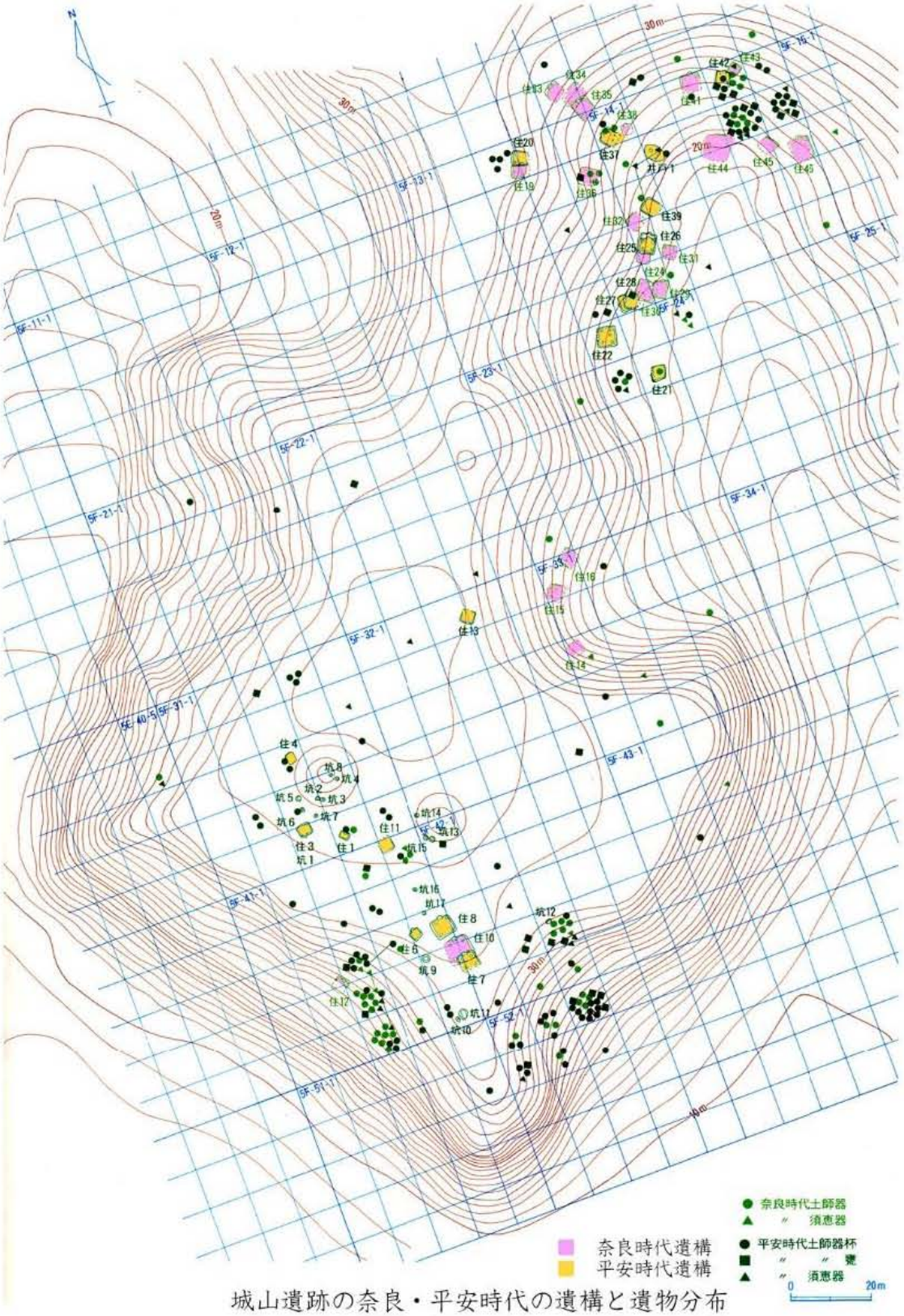
● 発掘遺跡
○ その他の遺跡
◯ 古代郷推定地

横芝光町の奈良・平安時代の遺跡

1 篠本城山遺跡　2 神山谷遺跡　3 新台遺跡　4 芝崎遺跡　5 中島遺跡
6 八石田遺跡　7 小川台遺跡　8 北長山野遺跡　9 東長山野遺跡
10 長倉宮脇・宮ノ前遺跡　11 鍛冶屋台遺跡　12 中台大木戸遺跡　13 石作台遺跡
14 古川新田低地遺跡　15 庚申遺跡　16 屋形粉豆遺跡　17 石室郷　18 狎猥郷
19 長倉郷　20 畔代郷

1．篠本城山遺跡

城山遺跡では台地上約３万㎡に、奈良・平安時代の住居跡が10軒、土坑が10基検出されたのみで、後世の遺構によって消失されたことを考慮しても、東隣の神山谷遺跡から比べると遥かに少ない。これは古墳と土坑（墓坑）の存在から、この台地が生活の場ではなく墓域としての聖地であると言う意識から、集落を形成しなかったと思われ、出土遺物も生活用具としての土器（土師器甕）は少なく、対して墨書土師器坏や須恵器が多かった。



城山遺跡の奈良・平安時代の遺構と遺物分布

城山遺跡全景

城山遺跡の中で１号住居跡は1.66×2.33mと小規模でありながら、坏が６点、甕８点のほか、鉄鎌、砥石、炭化豆・布など多くの遺物が、さながら生活当時そのままの姿で、一瞬の火災にあって、そのまま埋没したと思われる状態で出土した。

この住居跡は出土遺物から９世紀後半と思われ、この周辺からは同期の住居跡はなく、全くの孤立した存在である。ただ小豆と思われる炭化豆と、炭化した布が出土したのは注目される。しかし、この住居跡が特別な意味を有していたとは、遺物からでは判段できず、謎の多い住居跡である。

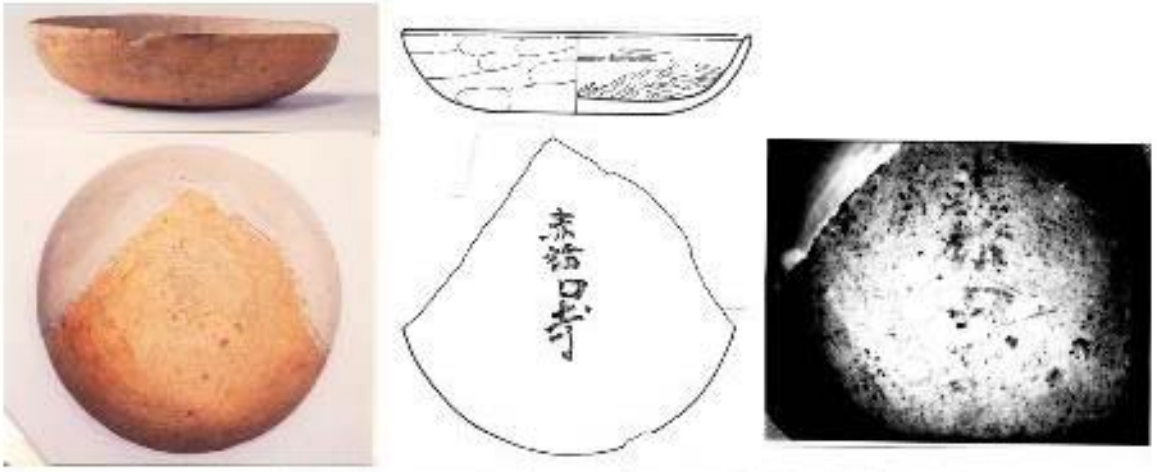
城山1号住居跡

城山1号住居跡出土遺物

炭化した布

炭化した豆

8世紀の奈良時代では、住居跡が台地上で2軒あり、平安時代とほとんど変わらない状況である。しかし、同期前半と思われる坏に「赤弥田（阿弥陀）寺」と墨書された遺物があり、注目される。寺院跡に関しては後述するが、西隣の新台遺跡で8世紀後半の坏に「吉寺」銘墨書土器や瓦塔が出土していて、寺の存在を暗示している。城山遺跡のそれは、おそらくどこかからの搬入品であろうが、この近くに阿弥陀寺という寺があったことを暗示している。



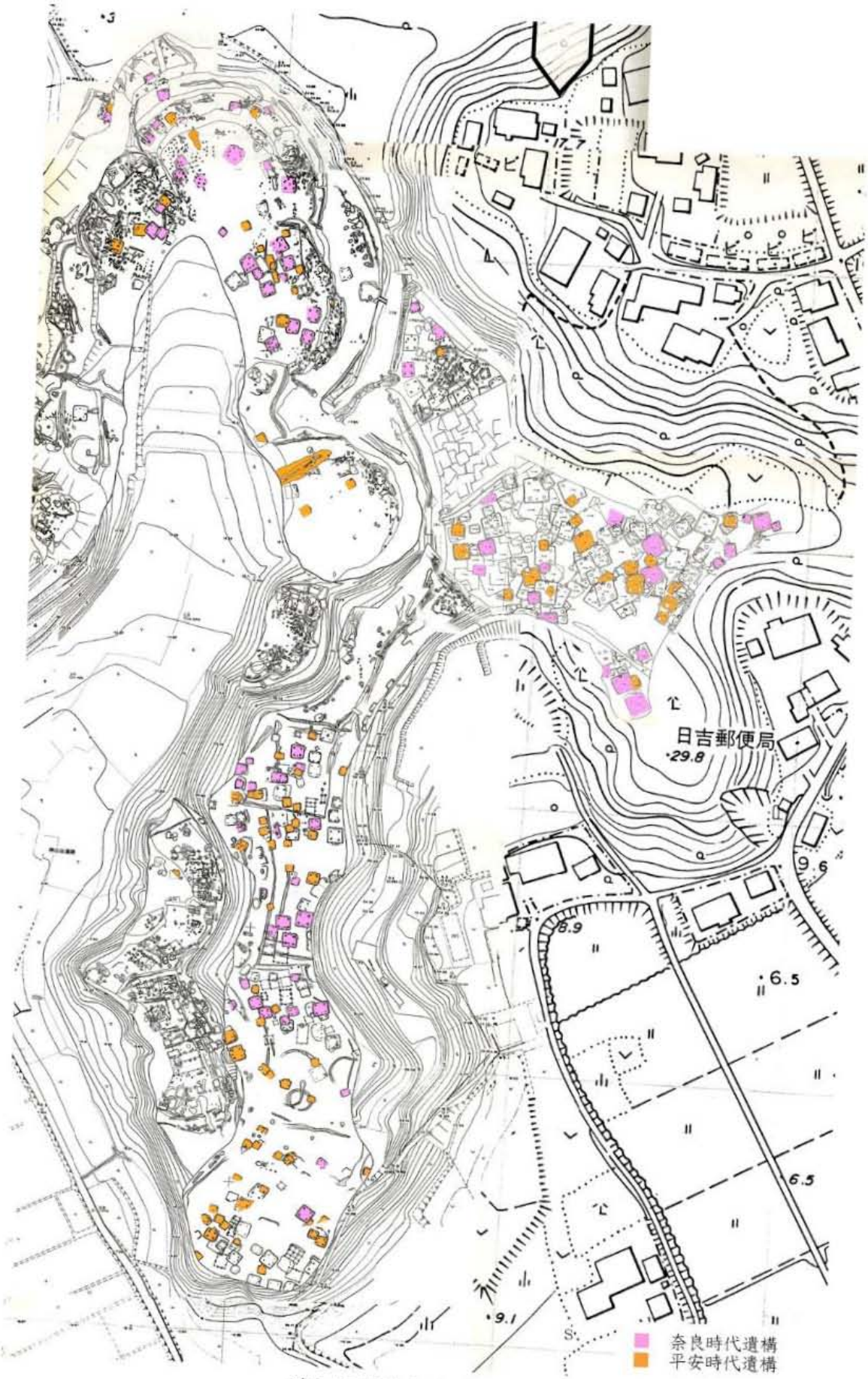
城山遺跡出土の「赤弥田寺」銘奈良時代墨書土器

奈良時代後半の10号住居跡

平安時代の9号土坑

城山と神山谷の間の谷頭部に点在する住居跡

2．神山谷遺跡



神山谷遺跡全体図

神山谷遺跡は、城山遺跡の東隣にあり、南北に細長い台地と城山との間の谷部斜面とから、奈良・平安時代の住居跡が約160軒ほど検出された。奈良時代は65軒ほど、平安時代は95軒ほどと、平安時代の方が時の長い分多い。分布の違いは大きく見られないが、奈良時代の方が北に多く、平安時代が南に多いという傾向を示す。本遺跡では古墳時代の住居跡が100軒以上あって、奈良時代はその継続した集落であったと思われ、平安時代中ごろの11世紀まで続いた事が遺物から分かった。特に奈良時代では遺物廃棄遺構が確認され、多数の遺物が出土し、この時が遺跡の最盛期であったと思われる。

南側から見た神山谷遺跡

北側から見た神山谷遺跡台地部

奈良時代の遺物廃棄遺構は、台地肩部に南北10m、幅３mの範囲に、土器や貝殻が上から捨てられた様な状況であった。

奈良時代の遺物廃棄遺構

古墳から平安時代まで重なる住居跡
６～７B号住居跡

平安時代中頃（11世紀）になると、住居跡の竈は貧弱になり、整った形を呈さなくなる。

斜面部で検出した平安時代集落終末頃（11世紀）の320号住居跡

奈良時代遺物廃棄遺構出土の坏類

奈良時代遺物廃棄遺構出土の甕類

神山谷遺跡の南部西側の台地肩のところから、大量の奈良時代の遺物が出土した。遺物は土師器・須恵器の坏・甕などのほか、貝殻もあった。状況から遺物の廃棄した所と考えられ、同時代のこうした遺物のまとまった廃棄場は、ほかではあまり例がない。

神山谷遺跡出土の墨書土器

神山谷遺跡から出土した墨書土器は50点ほどあり、多くは1字であるが、中には「大囮神」の3字、「大家」の2字がある。1字は「田」「中」「幸」「益」「神」「新」「本」「岳」などが判読できた。

神山谷遺跡出土の９世紀中頃の土器

神山谷遺跡での平安時代遺構は９世紀中頃が最も多く、左写真の様な坏・甕が一組となって出土する。これが当時の食器の１セットであろう。

甕は口縁に段を有する房総形が主流である。坏は轆轤挽き整形で作られ、内面を黒く処理しているものもある。

神山谷遺跡出土の10世紀後半の土器

10世紀後半になると、住居跡は少なくなる。甕の形はあまり変化しないが、坏は口が広がり、高台を有する碗形に変わってくる。

神山谷遺跡出土の瓦器碗

10世紀後半から11世紀になると、黒色で丸みを有し、高台の付いた器が出てくる。これは都で流行り出した瓦器碗を模して作ったもので、都の流行がこの地にまで伝わった事を示す。

神山谷遺跡出土の灰釉陶器

神山谷遺跡出土の須恵器

奈良・平安時代の須恵器や灰釉陶器は、主に今の愛知県瀬戸から浜松の間の東海地域で作られ、海路船で運ばれてきたものと思われる。しかし、中には質の余り良くない須恵器もあって、東海地域以外で作られたものも入ってきている。千葉でも須恵器を焼いた窯跡が発見されていて、近くでは八日市場の八辺でも見つかっている。また、常陸産（主に筑波山麓）の須恵器も多く入ってきている。

「富壽神寶」は弘仁9（818）年に初めて鋳造された皇朝十二銭のひとつで、奈良・平安時代の貨幣では最も多く造られ流通した。富壽神寶いくつか種類があり、これは大字の富壽神寶である。

帯金具・飾り

帯金具・飾りは今で言うベルトのバックルなどの金具とそれに付けられた飾りである。左から金銅製の鈒具、玉製の丸鞆、蛇紋岩製の巡方2点、銅製の蛇尾である。

鉄製鋤先

鉄製鎌

出土した鉄製品には、上の写真のような鋤先（これは縦鋤）、鎌などのほかに、刀子、紡錘車がある。

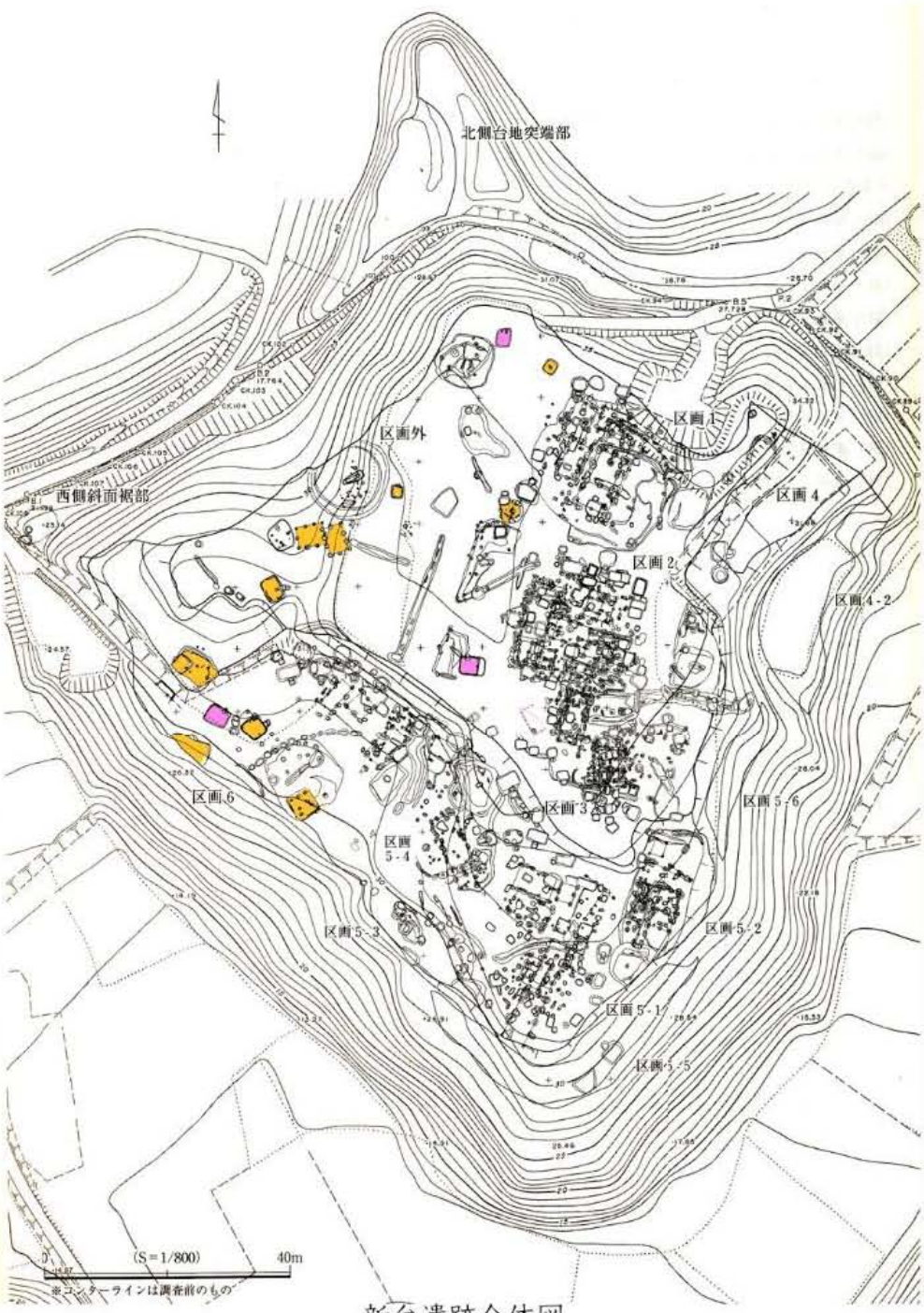
紡錘車には、左の写真のような石製や土製の紡錘車も多く、これは木の心棒に付けた弾み車としての道具である。

紡錘車

3．新台遺跡

新台遺跡は、城山遺跡の西隣に位置し、東西・南北とも100mを測る台地に、奈良・平安時代の住居跡が10軒、掘立柱建物跡2棟、土坑などが検出された。その密度は城山遺跡とあまり変わりないが、遺構の性質と出土遺物が大きく異なっていた。

新台遺跡では城山・神山谷両遺跡ではなかった掘立柱建物跡があり、また瓦塔や寺銘墨書土器が出土したことである。寺銘墨書土器は８世紀後半の遺物であり、建物跡や瓦塔は９世紀のものと思われ、伴に仏教関連関連であるところから、奈良・平安時代の新台は宗教的（主に仏教）な聖地として位置づけられていた可能性がある。



新台遺跡全体図

新台遺跡空中写真

６号住居跡からは、竈内の他、南壁際からもまとまって坏が９点出土し、その中に「古寺」等の墨書土器があった。

「古寺」銘等墨書土器が出土した6号住居跡

この土坑、上径3.5m、深さ２mで，不整形な堀片で、井戸の様であるが、水は出ない。

瓦塔が出土した９B土坑

6号住居跡出土の墨書土師器坏など

新台遺跡からは、瓦塔と共に「古寺」と書かれた墨書土器が出土した。しかし、寺跡と考えられるような遺構は検出されてなく、ここに寺があったかは分からない。もしかすると、簡単な小さなお堂でも建ててあったのかもしれない。

9B土坑出土の瓦塔

印西市馬籠遺跡出土の七重瓦塔

4．芝崎遺跡

芝崎遺跡は、栗山川が下総台地の間から九十九里平野に流れ出す左岸にあり、標高2～4mの沖積平野の砂州上の微高地に立地する。調査地は東西500m、幅60mの範囲で、そのほぼ全体で奈良・平安時代の畑跡と住居跡が検出され、中央部の最も高い所で掘立柱建物跡群が分布する大規模な農村集落であることが分かった。

芝崎遺跡航空写真

芝崎遺跡全体図

N
4
3.2
3
0
50m

遺跡の中央部に分布する掘立柱建物跡群は、平安時代の９世紀から10世紀代で、多くは２×３間の側柱式建物跡が多く、他に１×２間で中柱有、２×５間、廂柱付きなど様々であるが、あまりに重なっているため、その一時期の配列を見極めることは困難となっている。

畑跡は、時期的な分析をすると、隣り合う区画の畑の畝方向が直行するようにあり、畑の区画を意識的に定めていたように思われる。

芝崎遺跡中央部から西方向を見る

芝崎遺跡西部の畑跡と住居跡

奈良時代の105号住居跡

この奈良時代の105号は、遺跡のほぼ中央部の最も高い所にあり、5.96×5.80mで、同時期の住居跡でも最も規模の大きいものであった。４本の主柱穴に北壁中央に竈があり、壁際には壁柱穴が不等間隔に穿たれていた。床面は写真のように黒色土で平らに整地してあった。この黒色土を除去したのが、下の写真である。

105号住居跡の掘り方

床面の黒色土を取り除くと、住居跡を造るときに掘った跡が確認できた。底には鋤で掘った鋤先が残り、その鋤先が整然と並んでいるところから、計画的に掘っていることが分かる。また、この掘り方を見ると、一回り内側が深くなったいることから、この住居跡は当初一回り小さく造られ、後に拡張したことが推定された。

発掘前の奈良時代畑跡区画溝

これは奈良時代の畑跡の区画溝を検出したところで、そのちょうど十字路に当たるところである。しかし、区画溝は交差するのではなく、すれ違うように直角に曲がり、角のところから土師器甕が出土した。溝の覆土は黒色、地山は赤褐色の硬めの砂で、その堺は鮮明である。

上の奈良時代の畑跡と区画溝を発掘したのが、右の写真である。区画溝と畑の畝溝とは少し離れ、区画溝の角には、土師器甕が置かれている様に出土した。この区画溝から、奈良時代の畑跡は東西約20m区画の規模であったことが分かった。

発掘後の奈良時代畑跡の区画溝

洪水にあったと思われる平安時代の37・38号住居跡

芝崎遺跡は、栗山川沿いの標高２～４mの低地遺跡であるため、たまに洪水に見舞われた事もあったろう。

写真の37・38・192号住居跡は、遺物の出土状況が皆床より浮いていた事から、水害に見舞われたと思われる。

洪水で水没した平安時代の192号住居跡

重なって並列する奈良～平安時代の202～204号住居跡

真上から見た掘立柱建物跡群

芝崎遺跡の掘立柱建物跡群は、遺跡の最高所にあり、ほぼ方位に合わせて配列していたと思われるが、中心部は重なっていて、一時期の配列はよく分からない。

建物跡の多くは２×３間で、桁行が東西方向でものが多いが、東部で１×２間に有中心柱、２×７間などの変則的なものもある。この建物跡群はいずれも平安時代のものである。

奈良時代の掘立柱建物跡は、平安建物跡群の西部にあるが、群をなしてはいない。

柱穴の径は小さく、柱の配列は一定してなく、構造的に定型化していない様に思われる。

奈良時代の掘立柱建物跡

柱穴の最も大きい掘立柱建物跡

左の写真は遺跡中最も大きい柱穴を有する建物跡で、上部の径が１m、深さが1mほどある。２×４間で柱間が心々で桁行２m間隔、梁行2.5mで、５×８mの規模は建物跡群中最も大きい。

掘立柱建物跡群の中で、竈らしき遺構を検出した。周囲は住居跡の様な掘り込みはなく、その竈ではない事は分かった。この竈からは緑釉陶器も出土し、特別な遺構であったと思われる。

建物跡群の中の竈跡

芝崎遺跡の鍛冶遺構

鍛冶炉

遺跡の西部、栗山川に近い所で鍛冶遺構が検出された。外郭は住居跡の様に方形に掘りくぼめられ、床面上の中心より西寄りに鍛冶炉があり、その東側に鉄滓が分布していた。また周りからは金床石も出土し、消耗した鉄製品の打ち直しをした村の鍛冶屋であったろう。

芝崎遺跡では、墓坑と思われる土坑が40基ほど検出された。そのほとんどは群集していて、大きく２群に分かれて分布していた。１群は西部の栗山川に近い所で17基あり、うち１基は周囲に区画溝を有していた。もう１群は建物跡群の中にあり、こちらは７基であった。形状は円形。方形、長方形など様々で、径１mから一辺２m程度、深さ30cmほどである。多くは遺物を共ない、中には右の写真の様に、副葬品として埋納したと思われる土坑もある。

墓坑と思われる

墓坑の副葬品の土器

芝崎１期（８世紀前葉）

芝崎２期（８世紀中葉）

芝崎３期（８世紀後葉）

奈良時代の土器は、はじめ古墳時代の名残があり、坏の底は丸く、甕なども分厚い。中葉以降になると、轆轤挽きの坏が現れ、甕は薄り、常総形も８世紀を通じてある。坏には赤彩したものがあり、８世紀末まで残る。

平安時代になると、坏は手捏ねは少なくなり、ほとんど轆轤挽きで、底は糸切り、周縁をへら削りしている。甕はあまり変化は無く、口縁に段を有し、胴が丸い房総型が中心となる。

芝崎４期（９世紀前葉）

芝崎５期（９世紀中葉）

10世紀になると坏はほとんど轆轤挽きとなり、口の開きが大きく、底部は糸切り後の整形はしない。

中葉に緑釉陶器が入る。

後葉になると、丸みがあって高台を有した碗が、坏に代わって増えてくる。

芝崎６期（９世紀後葉）

芝崎７期（10世紀前葉）

芝崎８期（10世紀中葉）

芝崎９期（10世紀後葉）

芝崎10期（11世紀初）

11世紀には高高台の外反坏（碗）が現れ、甕は房総型が無くなり、分厚い胴丸の形になる。

この時期をもって平安時代の遺物は消滅し、遺跡は一時期断絶する。

奈良・平安時代の坏には、内面を磨いて黒色処理したものが、一定割合含まれる。これは素焼きの水漏れを防ぐ工夫であろう。また、この坏は特別な用途があったのかもしれない。

内面黒色処理した坏

８世紀の坏には、内外面に赤彩した坏が多くある。器の装飾であるが、ハレの用途として使われたのかもしれない。

赤彩した坏

緑釉陶器碗

緑釉陶器瓶片

碁石

長岡京から来た土器

左の土器は、栗山川に近い住居跡から出土した土器で、在地の土器と色、形、整形、土が異なっていた。追求した所、長岡京の土器とそっくりであった。これを向日市文化財センターで見てもらったところ、間違いなく長岡京の土器で、高槻で作られた事まで分かった。

芝崎遺跡出土の墨書土器

芝崎遺跡では、墨書土器が38点出土している。多くは１字書きである。

また、線刻土器も多数あり、十字か卅字が多く、中には格子状に入れたものがあり、何らかの呪(まじな)いに使ったかもしれない。

芝崎遺跡出土の線刻土器

芝崎・中島遺跡出土の瓦

芝崎・中島遺跡からは古代瓦が10数点出土した。その中で十字橘文の押形のある瓦があり、これは山武市の真行寺廃寺の瓦で、芝崎と当寺との関連を伺わせる。

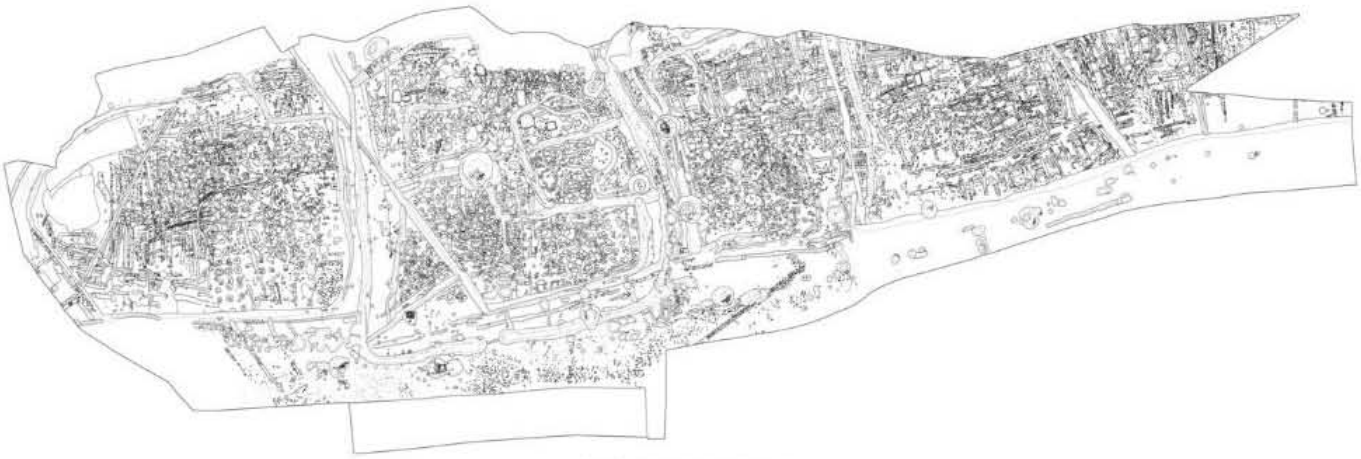
5．中島遺跡

中島遺跡は、芝崎遺跡の東へ500m離れた、周りを水田に囲まれた東西200m、幅50mの、東西に長い文字通り中州に立地し、周りの水田より１mほど高い低地の微高地上の遺跡である。遺跡全体には奈良時代から平安時代の畑跡を検出、西部に平安時代の掘立柱建物跡群があり、中央部に中世の2区画の居館跡がある。

掘立柱建物跡群の中心には、いわゆる四面廂付建物跡と呼ばれる大形建物があり、その西側に２×２間の建物が南北に３棟、北側に4棟、東側にも認められ、コの字状に配列している。これは当時の役所等の施設であったことが考えられる。

西側から鳥瞰

中島遺跡全体の航空写真



中島遺跡全体図

中島遺跡の掘立柱建物跡群

中島遺跡の掘立柱建物跡群は、中心に四面廂付建物があり、それを囲む様に東・北・西の３面に建物が並ぶ。その一群として、大きな施設と思われる。

中島遺跡の掘立柱建物跡の柱穴には、地固めに白色土をいれている。これは芝崎遺跡東部の水田下で見つかった海綿層を採掘して、使ったものである。これはカルシウムを主成分として、突くと粘って固まる。

黒い筋は奈良時代の畑跡である。

掘立柱建物跡の検出状態

中島遺跡掘立柱建物跡群の復元模型

平安時代の１号井戸跡

中島遺跡からは、掘立柱建物跡群の南東部で、建物跡と同時期と思われる井戸跡が検出された。深さは確認面から80cmほどであるが、中から文字通り井桁に組んだ井戸枠が出土し、底からは多数の土器等が出た。井戸枠の多くは杉材で、断面長方形に製材し、ほぞをあけているものから、丸太を割ったものまである。

最下段の井戸枠が、丁寧に製材し、ほぞ孔を開けた材で組まれ、その上は校倉組み、上段は割った丸太を載せただけと、上ほど粗雑になっている。

底から坏、須恵器甕などが出土し、使用後の埋め戻すときの、井戸鎮め儀式を行った痕跡と思われる。

真上から見た１号井戸跡

平安時代はじめの３号土坑

中島遺跡からは、15基の平安時代の土坑が検出され、その多くがすり鉢状で、遺物が多く出土し、ゴミ穴のようであった。規模、位置などはまばらで、どのような目的で掘られたかは不明確であるが、多くが湧水するので、井戸として掘られたのかもしれない。

中島遺跡出土の須恵器三足壺

中島遺跡からは、左の三足壺や下の緑釉陶器など、他の遺跡では見られない遺物が出土した。これは建物跡群とあわせて考えると、ここに特別な者がいた可能性を示している。

また、下の「畔代」「足代」「片野」墨書も、この地名が郷名を表している事は、前に述べた通りである。

この中島遺跡が、特別な場としてある時、機能していた事は確かである。

中島遺跡出土の緑釉陶器片

「足代」「畔代」（ともにあじろと読む）

「片野」

中島遺跡出土の墨書土器

6．八石田遺跡

八石田遺跡全景

八石田遺跡は、篠本の南に張り出した台地にあり、古墳時代から平安時代の住居跡が、25軒検出された。住居跡のほとんどは奈良時代である。

奈良時代の22号住居跡

7．小川台遺跡

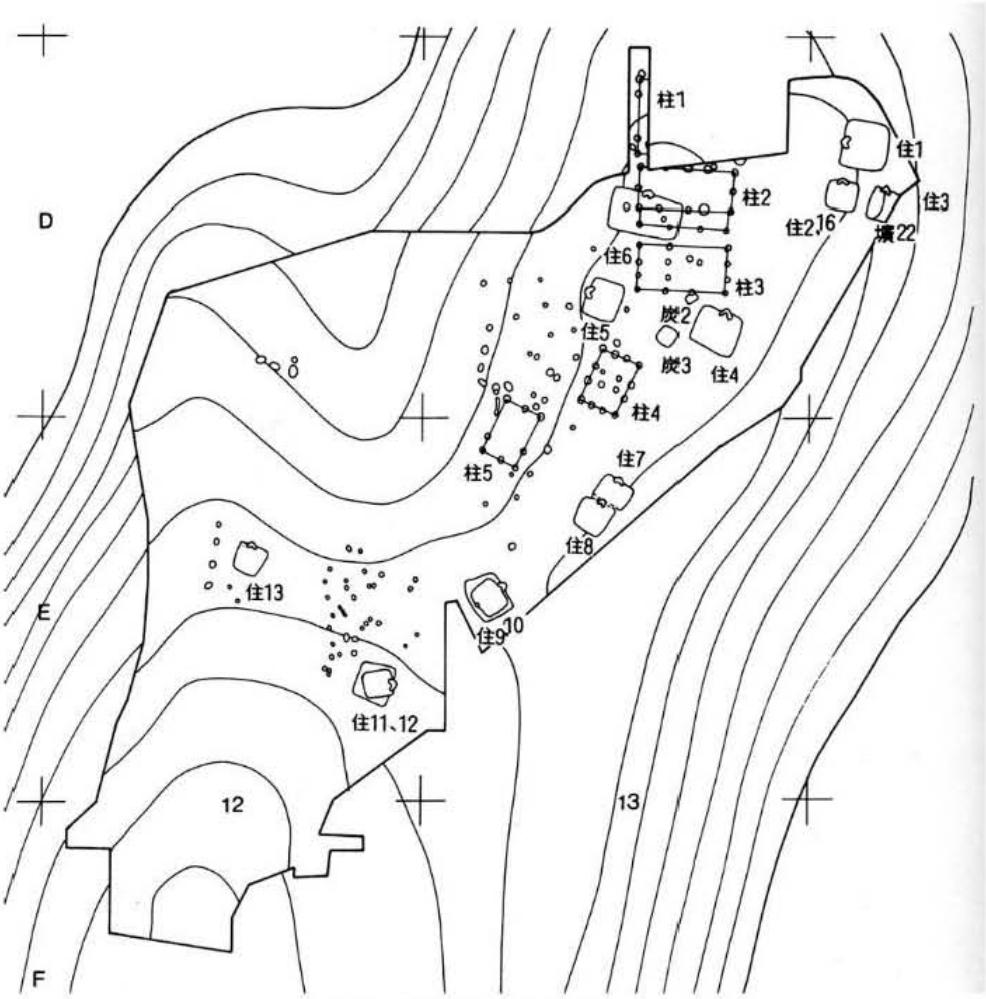
小川台遺跡全景

小川台遺跡は、小川台台地の西端部を発掘し、９軒の住居跡と２棟の掘立柱建物跡が検出された。住居跡はいずれも奈良・平安時代で、右のような遺物が出土した。

小川愛遺跡出土の遺物

8．北長山野遺跡

北長山野遺跡は、尾根状の台地に奈良・平安時代の住居跡が15軒が検出された。住居跡は重複しているのが3例あり、8世紀後半から9世紀前半代で、大きく分けても２時期程度に形成された小規模集落である。規模は一辺2.5～4mで、東長山野遺跡の8世紀前半代から比較すると小規模になっている。



北長山野遺跡北東部

北長山野遺跡北東部近景

重なる11・12号住居跡

北長山野遺跡の住居跡は、いずれも規模が小さく、柱穴があるのは１軒のみで、それも２箇所であった。

時期は２期から４期初め頃までで、短期の集落であった。

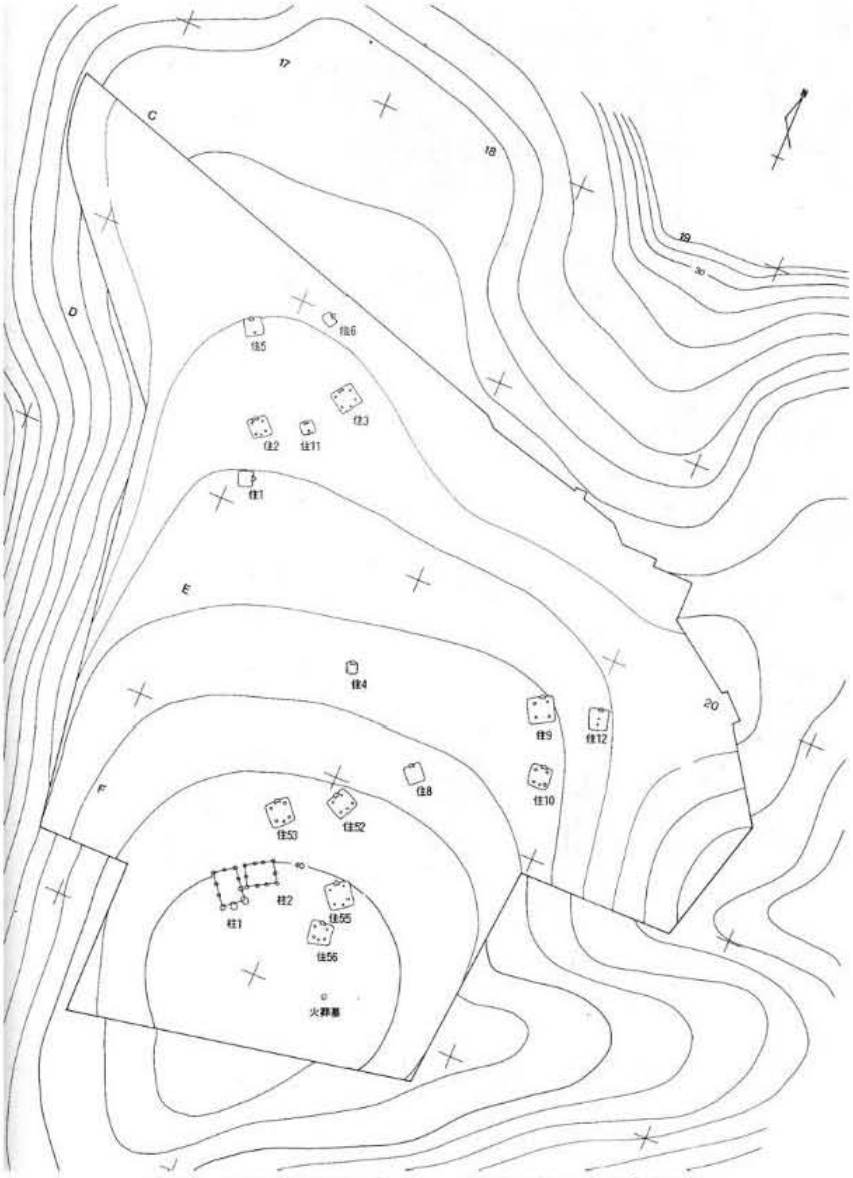
奈良時代の15号住居跡

15号住居跡出土の土器

9．東長山野遺跡

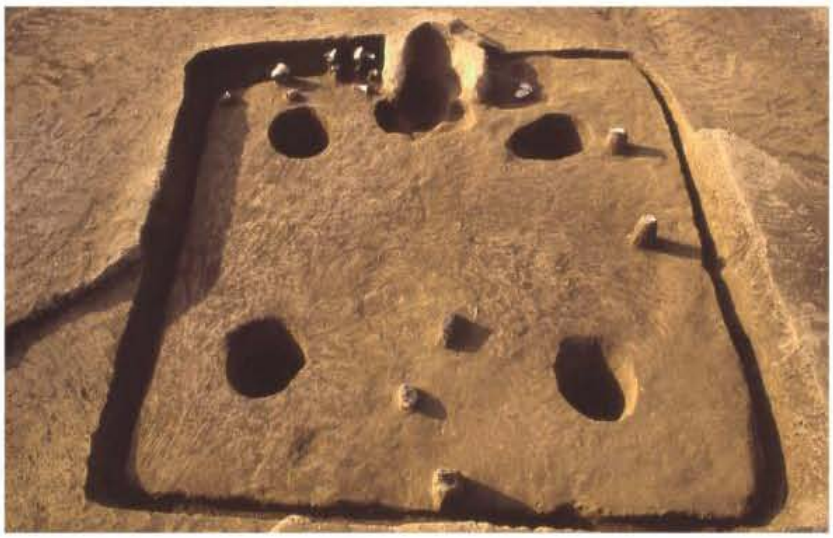
東長山野遺跡では、右の図の様に、奈良・平安時代の遺構は、住居跡15軒、掘立柱建物跡２棟、火葬墓１基が検出された。住居跡と建物跡は散在し、出土土器から８世紀前半代の一時期の集落であったと推定される。住居跡の規模は、一辺1.7ｍから最大4.9mと幅があり、4mを堺に柱穴の有無が違ってくる。掘立柱建物跡は、遺跡の最高所にあり、２棟とも柱間２間×３間で、ほぼ直角に隣り合い、柱穴の掘り方は大きくなく、住居跡と同じ時期であろう.

火葬墓は、最高所に位置し、80cm四角の中央に蔵骨器が納められ、周囲には木炭がつめられていた。蔵骨器の形から10世紀と思われる。



東長山野遺跡の奈良・平安時代遺構分布

東長山野遺跡空中写真



２号住居跡

この住居跡は大きい方で、方形の輪郭に、４本の柱穴があり、古墳時代からの大家族制の名残が考えられる。

東長山野遺跡出土の奈良時代土器

出土土器から１期の奈良時代はじめで、古墳時代の土器の形を残している。

下の蔵骨器は、赤焼きの須恵器で、表面にタタキ目がある。しかし、胎土に砂が多く、質が良くない。

火葬墓の検出状態

火葬墓出土の蔵骨器

10. 長倉宮脇・宮ノ前遺跡

長倉宮脇遺跡と宮ノ前遺跡は隣接して、南北に谷津が入って丘陵状となった台地に立地し、狭い台地上に集落が形成され、西端に大宮神社が鎮座する。

奈良時代の住居跡は28軒、平安時代の住居跡は50軒、掘立柱建物跡は44棟で構成される。住居跡は全体に散在するが、建物跡は南西部に集中するが、配列に規則性はない。遺物は特殊なものはないが、墨書土器が30点と少し多い。

長倉宮脇・宮ノ前遺跡全体図

長倉宮ノ前遺跡（西側から東へ見る）

宮ノ前遺跡の奈良時代92号住居跡

宮ノ前遺跡の奈良時代１号住居跡

宮脇遺跡の平安時代４号住居跡

宮脇遺跡４号住居跡からは、９世紀後半の大甕が２点出土した。

宮脇・宮ノ前遺跡から出土した奈良・平安時代の遺物は、全体では多くはないが、写真の８世紀後半の92号住居跡や、10～11世紀の土器がまとまって出土した。また墨書土器は30点あり、中には芝崎遺跡と共通するものが見られる。特筆されるのは、写真下の９世紀後半の須恵器大甕が、２点出土した事である。海岸地域に大形須恵器の流通が多かった事を示す資料である。

宮ノ前遺跡奈良時代92号住居跡出土の土器

宮ノ前遺跡出土の墨書土器

宮ノ前遺跡出土の10世紀末～11世紀の土器

宮ノ前遺跡出土の平安時代甑

宮脇遺跡出土の須恵器大甕

11. 長倉鍛冶屋台遺跡

鍛冶屋台遺跡空中写真

住居跡出土土器

鍛冶屋大遺跡は、宮ノ前遺跡の東方の小さな谷を隔てた標高30mの、ほぼ平坦な台地上にあり、弥生・古墳時代からの遺構が検出された。奈良・平安時代の遺構は、住居跡14軒、掘立柱建物跡２棟、土坑13基などで、古墳時代よりずっと少なくなる。８世紀はじめから９世紀はじめまでである。

12. 中台大木戸遺跡

中台大木戸遺跡全景

出土した平安時代の土器

中台大木戸遺跡は、北と南から谷が入る、分水界となる台地上に立地し、標高41mの平坦面少し広がる所である。

発掘では古墳時代の住居跡１軒と、平安時代の住居跡１軒、掘立柱建物跡３棟が検出された。これは９世紀中頃と思われる。

13. 石作台遺跡

石作大遺跡全景

石作台遺跡は、北と南とから谷が入る分水堺となる、標高42mの丘陵状の台地にある。

発掘では奈良時代の住居跡が５軒検出され、下の写真の遺物が出土した。遺物からは８世紀後半のもので、ほぼ一時期と思われる。１・２号は重複とされるが、拡張かも知れない。３号は拡張している。

出土した奈良時代の土器

14. 古川新田低地遺跡

古川新田遺跡（西側から、栗山川の対岸は芝崎遺跡である）

古川新田低地遺跡は、芝崎遺跡とは栗山川を挟んで対岸にあり、奈良・平安時代の住居跡と畑跡が検出され、同様な遺跡であるが、本来、陸続きであったかは分からない。住居跡は８軒ある。

３号住居跡

15. 庚申遺跡

庚申遺跡全景

本遺跡は、標高６ｍの低地の微高地に立地し、地山は砂地である。検出遺構は畑跡の畝溝や区画溝が検出され、遺物は、奈良・平安時代の土師器・須恵器が出土した。当地は武射郡畔代郷に比定されるが、それを示す資料はなかった。

庚申遺跡出土遺物

16. 粉豆遺跡

粉豆遺跡近景（報告書から）

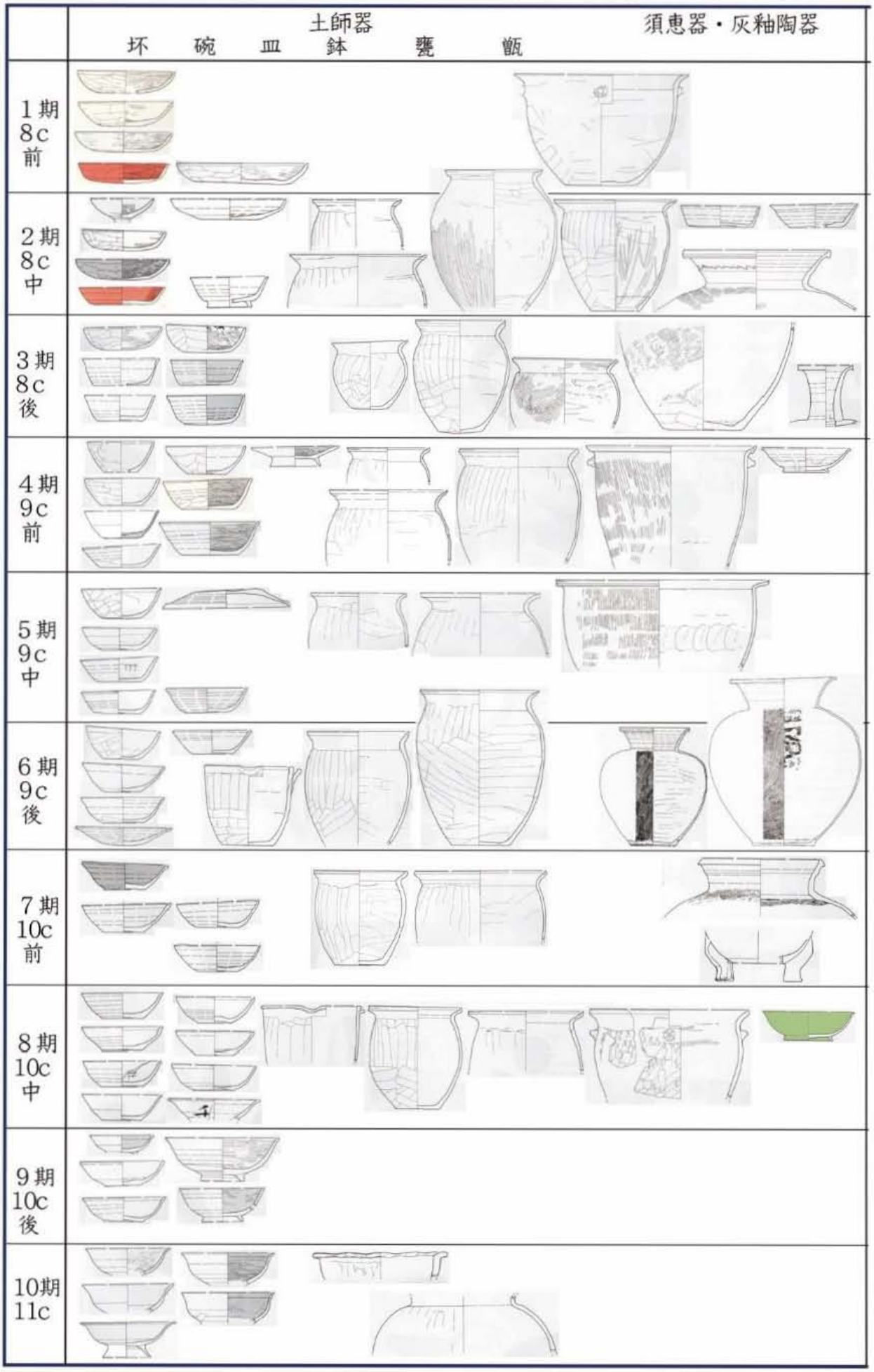
粉豆遺跡は、屋形四社神社の東北100mほどの所の砂州上の微高地にあり、発掘で右のような遺物と、鍛冶跡と思われる遺構が検出された。

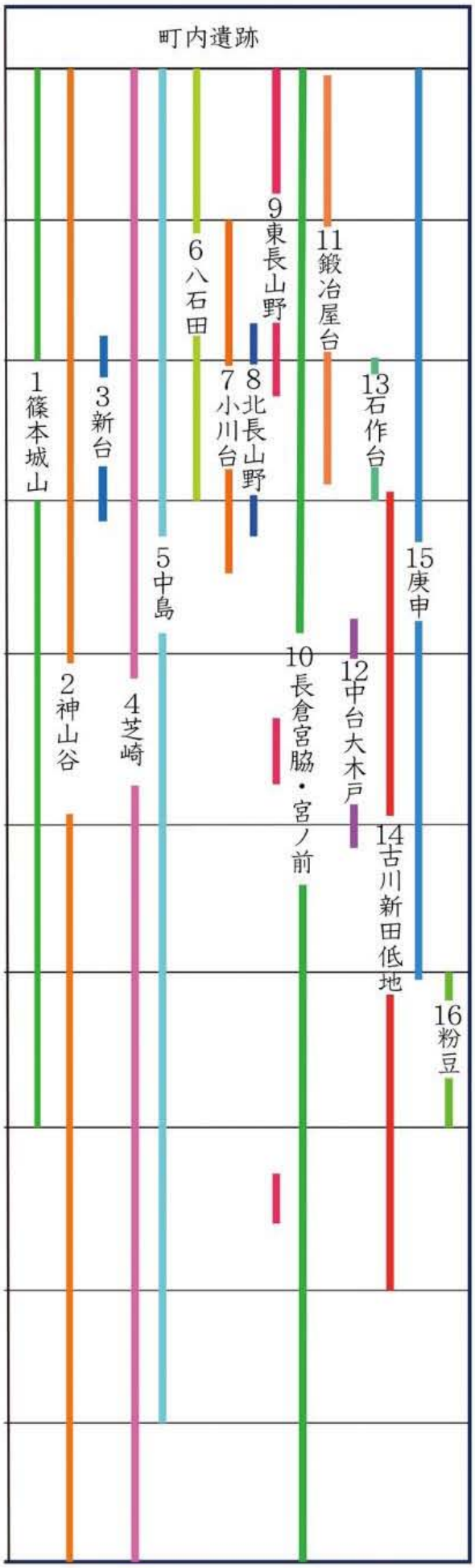
四社神社は10世紀末頃、平良兼が居館を構えた所と言われ、この発掘によって、その当寺の遺跡が発見され、一つの傍証となった。

出土遺物の後ろは須恵器の甕で、手前は土師器の甕・坏片・須恵器甕片である。いずれも小片であるため、時期の確定は難しいが、おおむね10世紀であろう。

粉豆遺跡出土遺物

横芝光町の奈良・平安時代の土師器・須恵器編年と遺跡





Ⅳ. おわりに

以上、横芝光町の発掘調査された奈良・平安時代の遺跡を紹介した。これを出土土器とその遺跡の存続時期とをまとめたのが、左の表である。土器の方はほとんどを、全時期にわたって存続した芝崎遺跡から採っている。

この表を見て一目で分かるのは、奈良時代初めから始まる遺跡が多い事である。その中で神山谷・長倉宮ノ前の様に古墳時代から継続する遺跡と、芝崎の様に奈良時代になって開始する遺跡とがある。遺跡の多くは台地上の立地であるが、芝崎は低地である。つまり奈良時代になって急激な人口の増加によって、新田開発等の耕地拡大が必要となり、低地への進出が促進されたのであろう。それは８世紀になって律令制の確立によって、豪族の支配下にあった部民が公民化され、人口の増加による食糧難を解消するため、百万町歩開墾が計画された。まさに古代のバブルの時代であったと言える。それがこの地域にも及んで、遺跡が多くなったのであろう。

一方で平安時代になると、遺跡は減少傾向になり、11世紀の中頃には遺跡が確認できなくなる。関東では承平５(935)年、平将門の乱が起こり、土地の荒廃が進んでいった。さらに公地の私有化と荘園の増大によって、律令制は崩壊していった。そして房総では、長元元(1028)年、平忠常の乱が止めを刺した。

その後、再び人の気配が見られる様になるのは、12世紀末、源頼朝が鎌倉に幕府を開く頃になってである。

参考文献
村山好文他（1985）長倉宮脇　横芝町教育委員会
伊藤一男（1986）横芝町文化財研究紀要Ⅱ　粉豆遺跡学術調査中間報告
横芝町教育委員会
青木幸一（1987）千葉県匝瑳郡光町小川台遺跡発掘調査報告　光町小川
台遺跡調査会
新井和之（1989）千葉県匝瑳郡光町八石田遺跡発掘調査報告　光町八石
田遺跡調査会
道澤　明（1990）東・北長山野遺跡　北長山野遺跡調査会
奥住　淳（1995）横芝町石作台遺跡（財）山武郡市文化財センター年報No.10
財団法人山武郡市文化財センター
河名　勉他（1996）千葉県の歴史　資料編　古代　千葉県史料研究財団
須田　勉他（1998）千葉県の歴史　資料編　考古３　千葉県史料研究財団
道澤　明（2000）篠本城跡・城山遺跡　財団法人東0総文化財センター
平山誠一（2000）中台大木戸遺跡　財団法人山武郡市文化財センター
平川　南他（2001）千葉県の歴史　通史編　古代２　千葉県史料研究財団
岸本雅人、宮内勝巳、本多昭宏（2002）神山谷遺跡(1)　財団法人東総
文化財センター
本多昭宏（2002）神山谷遺跡(2)　財団法人東総文化財センター
本多昭宏、宮内勝巳（2002）新台遺跡　財団法人東総文化財センター
道澤　明（2005）芝崎遺跡Ⅰ　財団法人東総文化財センター
稲見英輔・吉田直哉（2005）古川新田低地遺跡　財団法人山武郡市文化財
センター
島立桂、石渡典子（2007）長倉宮ノ前遺跡　財団法人山武郡市文化財センター
島立桂、田中万里子（2007）長倉鍛冶屋台遺跡　財団法人山武郡市文化財センター

平成２６年度企画展
考古資料で見る横芝光町の歴史３
―奈良・平安時代―

発行日　平成２６年10月１１日
編集・発行　横芝光町教育委員会
印刷　三陽メディア株式会社